

変化の激しいグローバル社会で求められる児童・生徒の資質・能力は「問題解決能力」であり、「創造的な

育成は不可能である。成長の時代までに求められるべき知識を伝え、試験で高得点を取らせる指導力が評価されてきたのである。それは、文明開化から高度経済

「日本の教師は優秀だ」

「コミュニケーション能力」と言われてきた。大勢の児童・生徒をしつけ、効率的な知識を伝え、試験で高得点を取らせる指導力が評価されてきたのである。それは、文明開化から高度経済

育てる教師に特に求められるのが、問題解決的・探究的な授業を構成する能力なのである。従来のような基本的な内容を押さえつつも、「この勉強は面白そうだ」という興味関心や、「このことは大事だ。ぜひ

「学びに火をつける教員」に

解決しなくては」という必要感・価値観をかき立て、子供自身に問題意識を持たせ、それを子供たち自身で構造化させたり、単元を通じた学習問題にまとめさせたり、根拠を持って予想を立てさせ、見通しを持った学びを進めさせる教師である。また、子供が自らの足

ような指導は少なく、それだけ難しい取り組みでもあるのだ。もっとも、教師自身がこれまでに問題解決的な学びをほとんど経験したことがないために、授業にどのような仕掛けをしたら良いのかイメージできないようでもある。

4年生の社会科「健康で安全な暮らし」を例に具体的に考えてみよう。いくら実感や驚きが大事だからと

夏の日には1週間も止まらなければならない。このように子供が夢中にならなければならない授業を仕掛け、ワークシート別掲II等を活用して、「臭く（不快）なるし、虫がわいて汚いし（不衛生）、道路まで塞が（り）て取り組むような学習を進めることで、学校内には一（緒）に問題に取り組み仲間と（楽しくもない、やりか）しての人間関係も育つので（？）といったごみの収集と処（理）の社会的な重要性に、ま（たくも）ないベシツクな問（題）集を出来るまで繰り返（し）やられる気の毒な子供た（ち）と違って、ここにはいじ

め、ごみの収集がとまったら、どんなことになるだろう。町の人の気持ちを言葉で書きましよう。

価値付け合えるような学びの場を演出する「学習コーナー」もある。「アクティブ・ラーニング」で目指そうとするのもこのような学びであろう。

しかし、今までに見た問題解決的な指導事例の多くでは、教師が問題を与え、それに対して児童が「主体的」に取り組むというものがほとんどであった。子供自身の学びに火をつける

いって、教室に生ごみを持ち込むわけにはいかない。家庭に働き掛けてごみ出しの体験をさせたり、清掃事務所の協力を得て収集車の観察をしたり、清掃工場や埋め立て処分場の見学を手配したりといった、家庭や関係機関との連携も重要である。

